



# 市史通信

## 第27号

仙台市博物館  
市史編さん室



上:刃傷事件の事後処理に関する文書が一括して納められた通称「伊達の黒箱」  
右:寛文事件を題材にした歌舞伎「早苗鳥伊達聞書」の浮世絵（どちらも仙台市博物館蔵）

仙台市博物館企画展

## 仙台藩の御家騒動

寛文事件を追いかけろ!

会期 平成24年 4月20日(金)～6月10日(日)



## モノがたり 仙台

### 「伊達の黒箱」の秘密をひもとく

かつて、仙台藩を大きく揺るがした御家騒動がありました。寛文事件とも伊達騒動とも呼ばれるこの事件は、万治3年(1660)、3代藩主伊達綱宗が不行跡を理由に、幕府から突然の隠居を命じられたことに始まります。急ぎよ、当時2歳だった綱宗の子・亀千代(後の綱村)が4代藩主にすえられ、一門(藩主家と血縁関係がある重臣)の伊達兵部宗勝と田村右京宗良を後見人とする体制がとられますが、藩内は安定しませんでした。

兵部と結んだ目付(藩士の職務を監察する役)の実権が拡大したことに批判が高まるなか、一門の伊達安芸宗重と伊達式部宗倫の間で領地の境界争いが起き、事態は長期化します。ついには、検地役人の境界裁定に異議を唱えた安芸が、役人の不正と後見人下での藩政の混乱を幕府に訴え、公儀による審議となりました。そして寛文11年(1671)、幕府大老酒井雅楽頭忠清邸での審議の最中、以前から兵部に接近し、目付と意を通じていた奉行(家老)の原田甲斐宗輔が突如安芸を斬り、甲斐と安芸、さらに同席していた奉行柴田外記朝意が死亡するという刃傷事件が起きてしまいます。後見人として事件の責任を問われた兵部は高知へ配流、右京は閉門、原田家は断絶となります。その一方で、4代藩主綱村は幼少を

理由に許され、仙台藩の「御家」安堵が申し渡されました。

さて、仙台市博物館には通称「伊達の黒箱」といわれる、寛文事件に関する資料を納めた木箱があります。明治維新の頃に一時行方不明となったこの「黒箱」には、当時こんな噂がありました。

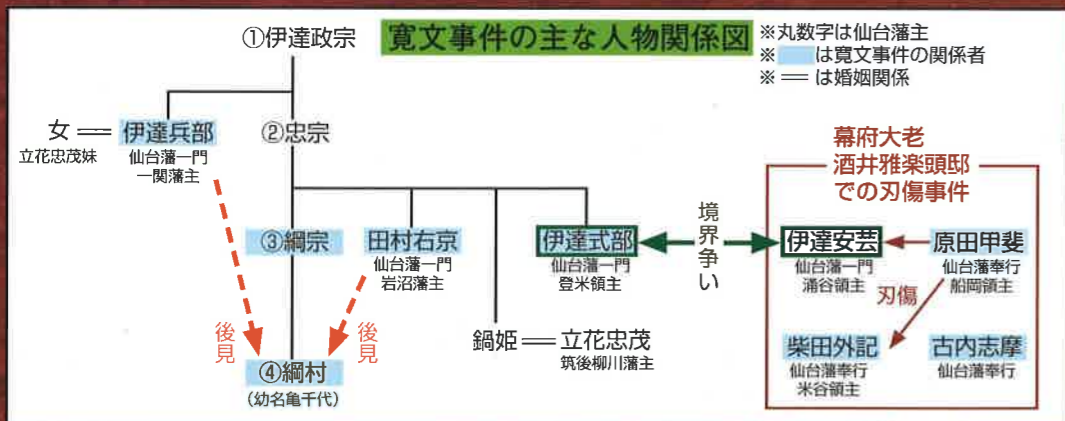
黒箱には、甲斐の忠義を示す文書が秘められている

「黒箱」は明治26年(1893)に伊達家へ戻り、文書目録が作られたことで、その中味が明らかとなります。中に納められていたのは、刃傷事件後の仙台藩江戸屋敷での取り締まりや火の用心の件、江戸に残された安芸・甲斐・外記・兵部家臣の処置の件、幕府側との打ち合わせの件、検地役人の審議や親族らの取扱いに関する件などの文書でした。いずれも刃傷事件以後に江戸にいる仙台藩の役人と幕府、国許の間でやりとりされた往復書簡であり、生前の甲斐の行動に関する文書は一つもなかったことから、「黒箱」が甲斐の忠不忠の真相を隠した箱だという噂は否定されたのです。

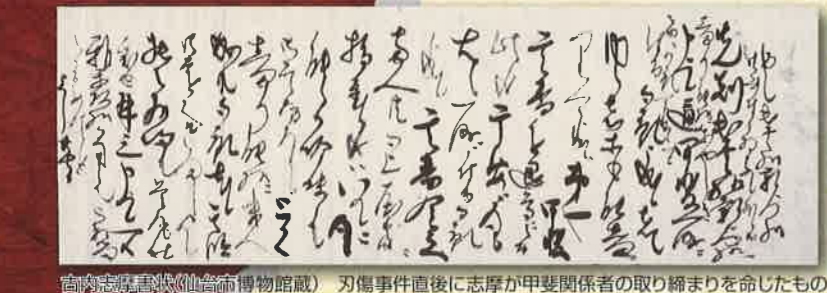
しかし「黒箱」には、歴史の表舞台には現れない兵部や甲斐の家臣たちの処遇、事件の幕引きを演じた人々の数十日間の詳細な動きなど、刃傷事件から約1カ月間の、事件処理に関わる公私の速報を伝える文書が納められています。「黒箱」は、刃傷事件がどのように処理されていったのかを知るための、まさに「ブラックボックス」\*といえるでしょう。

\*航空機に搭載されるフライトレコーダー。飛行中のデータと音声発信内容を記録する装置で、墜落事故などの際に原因究明に使われる

歌舞伎「伽羅先代萩」や山本周五郎の小説『樞の木は残った』は、寛文事件を題材にした作品として有名です。これらの作品は伊達家の「御家」の安泰をもって一件落着となりますが、はたして事件の関係者はその後どうなったのでしょうか。歌舞伎や小説では語られない一件落着のその後、表舞台に現れない脇役たちの歴史にも、ドラマは隠されています。



寛文事件のあらまし	
万治元 (1658)	伊達綱宗が3代藩主になる
万治3 (1660)	綱宗が不行跡を理由に幕府から隠居を命じられる。2歳の亀千代が4代藩主となり、伊達兵部と田村右京が後見人となる
寛文2 (1662)	奉行奥山大学が両後見人の領地支配に関する六カ条問題を糾弾
寛文3 (1663)	奥山大学が奉行を解任される
寛文5 (1665)	伊達安芸と伊達式部の間で領地の境界争いがおこる
寛文6 (1666)	里見左衛門が兵部の独断的な藩政運営を批判
寛文7 (1667)	仙台城での席次の乱れを巡り、伊東七十郎らが不服を申し立てる。安芸と式部の間で、再び領地の境界争いがおこる
寛文8 (1668)	兵部暗殺を計画した伊東一族が処罰される
寛文9 (1669)	安芸と式部が両後見人の裁定案を受け入れ、境界の検地がおこなわれる
寛文10 (1670)	安芸が検地の不正や両後見人による藩政の混乱を幕府に訴える
寛文11 (1671)	幕府大老酒井雅楽頭邸にて安芸、奉行の原田甲斐・柴田外記・古内志摩を審問中、甲斐が刃傷事件を起こし、安芸・甲斐・外記が死亡。事件の責任を問われた兵部は高知に配流、右京は閉門、原田家は断絶、藩主綱村は幼少のため赦免



# その後、あの人は？

## 寛文事件一件落着

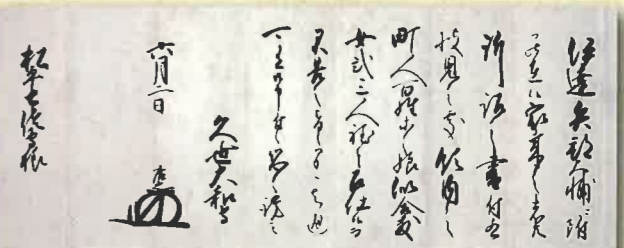
### 其貳 伊達兵部宗勝のその後

—政宗の末子、無念の最期—

高知への配流を命じられた兵部は、刃傷事件からわずか20日足らずで、高知藩の家臣約180人に囲まれて江戸を発ちました。大坂から船に乗り、約1カ月かけて、高知城下へと到着します。高知城にほど近い小高坂村に屋敷が建てられ、兵部は幕府の「御預人」としての晩年を過ごします。日常の給仕をする使用人を雇うにも、高知藩を通じて幕府の許可を必要とする不自由な生活を送りました。

配流から8年後の延宝7年(1679)11月4日、兵部は59歳で亡くなります。幕府はその死を確認するため検使役人を高知に派遣しました。約1カ月後、検死が終わった兵部の亡骸はようやく火葬され、高知にある吸江寺に墓が建てられました。

伊達兵部の墓(高知市指定史跡) 高さ2メートルほどの、立派な石造の墓は、流人とはいえ兵部の出自や身分の高さが配慮されている



老中が高知藩主にあてた書状(土佐山内家宝物資料館蔵) 高知の町民や農民の娘から兵部の使用人を雇うことを、幕府老中が許可している



原田甲斐供養碑(東陽寺) 背後にそびえるイチョウが、甲斐の首を埋めた場所の目印だと伝えられている

### 其参 原田甲斐宗輔の七回忌法要

—残された旧家臣の忠義—

刃傷事件を起こした原田甲斐の一族には厳しい処分が科されました。甲斐の所領は没収され、原田家の男子の血筋は絶やされてしまいます。甲斐の家臣のなかには名取郡植松村と飯野坂村(どちらも名取市)に移され「新百姓」となった者もいました。侍から百姓へ、身分の変更を余儀なくされた人々です。

しかし延宝5年(1677)3月27日、旧家臣たちは甲斐の菩提寺である東陽寺(登米市東和)に集まり、甲斐の七回忌の供養を行いました。死後、「悪人」のレッテルを貼られた甲斐であっても、家臣が主君を供養する思いは変わらないようです。



原田甲斐宗輔肖像(個人蔵)

### 其肆 刃傷事件の生存者、古内志摩義如

—事件後の藩政を憂う—

刃傷事件以後、実質的な藩のトップとして事後処理にあたった古内志摩は、藩主綱村からも信頼を得ていました。

事件の翌年、志摩は綱村の藩政にいずれ支障をきたすおそれのある藩士を、「新悪人」と名指して綱村に注意を促そうと動きます。また、茂庭主水(元姓)など名だたる重臣を列挙して批評しました。延宝元年(1673)、死期をさとした志摩は、幕府に「新悪人」の藩政進出を阻止してくれるよう遺言を残しました。刃傷事件以後も、藩内の派閥構造が依然として残っていたことがわかります。

さて志摩の死後、「安芸の行為は忠か不忠か」と綱村に問われた家臣は、「志摩は忠義と見ていた」と答えました。綱村は志摩の見解に頷き、安芸の息子宗元(元姓)に父の功績を称える書を送りました。「安芸=忠臣」ということが藩の公式見解となった背景には、刃傷事件唯一の生存者・志摩の影響があったのです。

### 其四 自立した4代藩主、伊達綱村

—藩主親政に燃える…しかし—

刃傷事件により後見人が廃止され、さらに藩政を監視するために幕府から派遣されていた国目付が延宝2年(1674)に廃止されると、綱村は藩主として自立の道を歩み出します。

親政に燃える綱村は、藩の職制改革や、中級家臣からの人材登用、寺社の造営、儒学の興隆などを積極的に行いますが、一方では偏った人事や極端な政治、厳しい賞罰、悪化の一途をたどる藩財政に対する批判が高まります。藩内では一門らを中心に綱村への諫言書が出され、その筆頭にはかつて綱村自身が忠義の家と賞賛した涌谷伊達家の当主宗元(元姓)がいました。しかし根本的な改善はみられず、元禄16年(1703)、綱村もまた父の綱宗と同様に、藩の重臣や親戚大名の意向によって半ば強制的に隠居させられることとなります。



伊達綱村肖像(仙台市博物館蔵)

# 資料みつけた

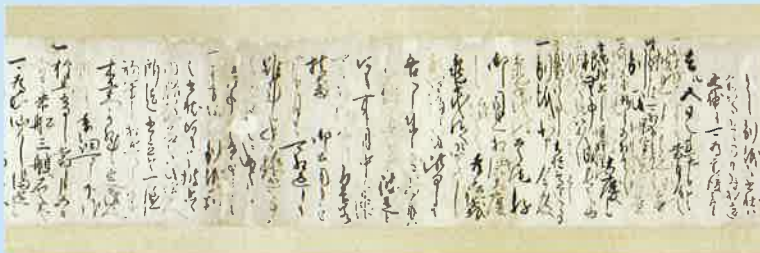
## 伊達兵部の書状によせる思い

仙台市博物館にある、1通の伊達兵部宗勝書状。これは江戸にいる兵部が、国許にいる彼の家老に宛てたもので、明治になってから1巻の巻物に仕立てられました。このいきさつには、寛文事件のその後に関わるドラマが秘められています。

明治41年(1908)、旧仙台藩士の大槻直信が、先祖の墓石を栽松院(若林区新寺)に建てました。翌年、それを知った旧仙台藩士で医者(渡辺道作)が、所蔵していた兵部書状を直信に贈ります。実は、直信の先祖である大槻斎宮は兵部の家臣で、配流先の高知へ随行した人物でした。道作は、最期まで兵部に忠義を尽した斎宮を「畢忠の臣」、先祖の忠義を敬う孝徳をもった直信を「追孝の孫」と讃えて、書状を直信に贈ったのです。

寛文事件前後の斎宮の動向については、藩の公的な記録にも残されています。斎宮は兵部から新規に150石を与えられますが、刃傷事件後、兵部に随って高知へ渡り、知行は召上げられます。斎宮が仙台へ復帰したのは、兵部の死の翌年、延宝8年(1680)のこと。斎宮は藩から知行67石を拝領し、その後、大槻家は仙台藩の家臣として明治まで続きました。そして、兵部の死去から230年後、斎宮の子孫が、書状を通じて兵部に対面したのです。

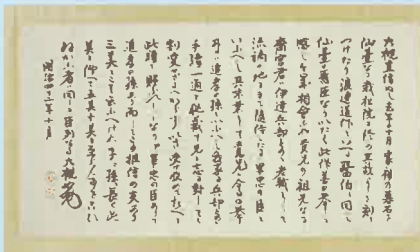
このいきさつに感慨を覚え、筆をよせたのが富田鉄之助・大槻文彦・大槻如電です。いずれも旧仙台藩の出身で、鉄之助は財界、文彦・如電は学界の著名人でした。罪人となった兵部に最期まで忠節を尽しながらも、大槻の家を守った斎宮の姿は、戊辰戦争、明治維新を経て藩が廃止された時代を生きる、旧仙台藩出身の彼らの境遇と相通じるものがあつたのかもしれない。江戸から明治へと、時代を越えて、寛文事件の「その後」のドラマが付け足されたのです。



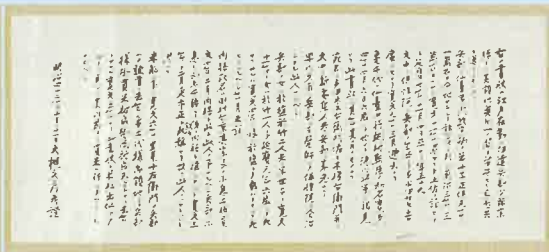
伊達兵部宗勝の書状



富田鉄之助による書「敬始」



大槻如電が記した兵部書状の伝来の経緯



大槻文彦による兵部書状の翻刻・考証のうち考証部分



### 『仙台市史』 既刊好評発売中!

寛文事件を知るなら  
**通史編4 近世2**

- ◆オールカラー A5判 604頁
- ◆定価3,000円(本体2,858円)

寛文事件に始まる江戸時代中期の藩政の展開や、仙台北下や近郊村落での人々の生活を紹介します。



県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。

配送をご希望の方は、電話・FAXで宮城県教科書供給所へ、お申込みください。

発売元/宮城県教科書供給所  
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3  
TEL:022-235-7181 FAX022-235-7183

仙台市史編さん事業の機関誌

### 『市史せんだい』 好評発売中!

最新刊  
**市史せんだい  
Vol.21**

- ◆A5判 128頁
- ◆定価 500円(税込)



巻頭は「東日本大震災における資料レスキュー活動」。震災によって被害を受けた仙台市内の歴史資料を救い出し、応急処置や一時保管をおこなった仙台市博物館の活動を報告。また、特集「大正100年」では、大正時代の仙台の街の様相を、豊富な写真資料とともに紹介。

仙台市博物館でお求めになれます。

※「仙台市史」「市史せんだい」に関するお問い合わせは、仙台市博物館市史編さん室へどうぞ